令和８年度「地域づくり表彰」　審査後の総評

今年度の「地域づくり表彰」も、全国各地からユニークで多様な実践例が寄せられた。人口減少や高齢化、担い手不足、獣害、離島性、公共サービスの縮減など、地域を取り巻く課題は年ごとに複雑化している。しかし、今年の推薦事例は、そうした逆風を「**単なる困りごと**」として留めず、「**新たな価値創造の契機**」として、**楽しさややり甲斐とともに**実現したい、という意志に満ちあふれていた。

審査を通じて感じたことを、全国の地域づくり関係者の皆様へのメッセージとして、五つの観点から述べたい。

Ⅰ　課題を直視する力が、地域づくりの出発点である　：　課題の正確な言語化はチカラになる

今年度の事例の特徴は「何に困っているのか」が明確で、優れた事例ほど、その課題を曖昧には語らなかった。

「観光客が増えすぎて困る」、「地域に刺激を与えてくれる人が必要」、「山椒を収穫する手が足りない」、「地域の困りごとの相談が無くなった」「新幹線駅があり移住するには東京が近すぎる」等々。

出発点となる課題が具体的で、だからこそ、取るべき行動も明確になり、人々を巻き込むことができた。

困りごとを正確に言語化できた活動ほど、次の一歩が見えてくる、ということを改めて感じた。

Ⅱ　人を動かすのは「コンセプト」と「仕組み」の組み合わせである　：　活動を回す車輪について

では課題は見えた。しかし、それだけでは人は動かない。つぎの動きを産むのはいったい何なのか。

今年の受賞事例では、**課題に対して魅力的なコンセプトと言葉が与えられていた**ことが印象的だった。

「”不満”を”誇り”に」「ワン・ジビエ」「まちの部屋」「地域維持レスキュー」など、それぞれの活動には、人々が理解しやすく共感しやすい「フレーズ」と「物語」があり、「参加したくなる世界観」が提示されていたように感じた。

さらに重要なのは、それが**理念だけに終わっていない**ことである。　シェアキッチン、ドラッグストア内の交流拠点、高校生と地域をつなぐ仕組み、副業人材のマッチング、観光収益を地域保全へ循環させる仕組みなど、それぞれのコンセプトを**実装する、具体的な制度や運営体制**を積み上げていったことが成果へと繋がっていた。

優れた地域づくりは、　「共感できる物語」　と　「実際に物語を動かす仕組み」が　両輪となっている。

Ⅲ　持続可能性の鍵は、「個人・属人」から「チーム」への進化にある　：　一夜の花火で終わらないために

審査会で繰り返し議論されたのが「**持続可能性**」であった。これまでの「地域づくり」の現場には、「この人がいるから成り立つ」という事例が少なくなかった。しかし今年度は、それを乗り越えようとする取組が数多く見られた。

高校生が始めた活動を**法人化**し次世代へ引き継ごうという取組、**中間支援団体を核とした**行政・企業・住民(団体）の多者連携、　**移住者・二地域居住者「自身が」担い手となる**移住促進の仕組みなど、発端となったひとりや少人数の熱意を、組織やチームの力へと転換する努力が随所に見られた。

もちろん、情熱あるリーダーの存在は依然として重要である。しかし、これからの時代に求められるのは、リーダーの背中に続く人材を意識して育てること、そして誰かが抜けても回り続ける構造をつくることである。

今年の事例からは、地域づくりが「属人モデル」から「チームモデル」へと進化しつつあることが感じられた。

Ⅳ　地域の未来を広げるのは、専門性のある多様な主体との連携である　：　企業・金融・大学・農家・漁師等

今回、審査会が注目したのは、企業・金融・大学、副業人材、関係人口等、拡大する多様な主体の連携であった。

企業との連携は、もはや寄附や協賛の段階ではない。地域課題の解決そのものに**企業自身が参画**し、**企業側も学びや価値を得る関係**が生まれている。また、移住や二地域居住の分野では、副業人材や地域外人材が地域に新たな視点を持ち込み、地域も**事業継承を含め**それを受け止める力が培われてきている様子が見られた。

結果、外部人材を「お客様」ではなく、次の動きの継承・成長の担い手として迎え入れている事例が多かった。

「地域づくり」は、もはや地域住民のみでは担いきれない・完結しない一方で、外部依存でも長続きしな

い。

内と外が相互に刺激しあった協働で、新たな展開や価値を生み出す姿が見れたのが、今年の特徴と言える。

Ⅴ　これからの地域づくりを支える「公共の魅力」　：　公共を担うことの楽しさ・嬉しさ・やりがい

最後に、本年度の審査を通じて最も強く感じたこと。それは**「公共の魅力」の再発見**である。

報酬も無いのに、**なぜ多くの人が地域づくりに関わるのか**。そこには、**地域のために働くこと、人の役に立つこと、自分の力が地域の未来につながることへの喜び**がある。そこに**「楽しい」「面白い」「やりたい」「うれしい」「誇らしい」**が生まれ加わっていく。　今年の発表者の皆さんから繰り返し聞かれた、こうした組合せこそが活動の原動力だった。　どれほど優れた制度や事業でも、人の心が動かなければ長続きしないし、意義や意味が感じられれば、更なる活動への意欲も高まる。本年度の応募事例は、「公共の魅力」を実践を通じて見せてくれたと思う。

地域づくりとは、地域課題の解決であると同時に、公共を通じ人々が誇りや生きがいを見つける営みでもある。

今回の受賞団体をはじめとする全国の挑戦が、次の地域づくりの時代を切り拓いていくことを期待したい。

令和８年度「地域づくり表彰」審査会 座長　　坂 田 一 郎 （東京大学 執行役･副学長）